



学生時代を振り返って

近藤俊之

工学システム学類第三期卒業生

<はじめに>

私は、第3学群工学システム学類を平成9年に卒業し、今はエンジニアとして自動車会社に勤めています。筑波大学を卒業してから早5年が経とうとしていますが、当時の学生生活を昨日のことにように思い出すことができます。必修の単位を落としそうになって、担当の先生にお願いをしに行ったこと、徹夜で試験勉強して試験に寝坊したこと、研究室に寝泊りしながら卒論を仕上げたこと、友達と朝まで語り明かしたこと、挙げると限りがありません。今となってはどれもいい思い出であり、社会人として、エンジニアとして、また1人の人間としての礎になっています。

今回、執筆にあたり、これら筑波での学生生活を振り返ってみて、それがどのようであったか、また今の自分にどのような影響を与えているかを改めて考えました。

<つくばという環境>

私の学位記には江崎玲於奈先生と白川英樹先生という偉大なノーベル賞受賞者の名前が連なっています。偶然（幸運）にも卒業するときに江崎先生が学長で、白川先生が学群長であったからなのですが、このような学位記を頂いて大学を卒業できたことを非常に光榮に思います。今や、つくばには世界的に有名な研究者が数多く集まっていて、日本の頭脳を担っているといっても過言ではない状態です。戦争が起これば真っ先に爆弾が落とされそうで少し心配なのですが、つくばがそれだけ研究や教育に適した場所として選ばれているということだと思います。

学内の駐車場のナンバープレートを見れば分かるように筑波大学は他に類を見ないほど全国各地から人が集まっています。また、「石を投げれば、教授か外国人に当たる」に表されるように外国から来た留学生や、研究者が大勢います。寮

に住んでいた頃、東北弁、標準語、関西弁、九州弁、英語などが乱れ入った会話をしていたのを懐かしく思います。何の努力もなしに、異文化コミュニケーションできる場が提供されていて、人に対する接し方の多くを学びました。

実家（岡山）に帰ると、どこから情報を仕入れるのか分かりませんが、友人から「つくばって何もないんやろ？」とよく言われた覚えがあります。また、つくばのことを「陸の孤島」とうまく表現する人もいました。半分、当たっているような気もしますが、実際には、本気で何かをしようとしたときに、集中してそのことに打ち込めるすばらしい環境であると考えられます。研究に打ち込むにしても、スポーツに打ち込むにしても、それを邪魔するものがまわりに無いというのは重要なことであると思います。

この他にも、研究都市として発展させる際、建物が建つ前に計画的に道路を整備したため、交通渋滞が少ないことも、つくばの大きな特徴だと思います。今住んでいる宇都宮と比べ、短時間でいろいろな場所に移動することができます。生まれてこの方、様々な所に住みましたが、私にとって、つくばが一番快適な場所でした。そして、今勤めている会社がつくばにあればと考えてしまいます。

＜研究に対する姿勢＞

私の周りには情熱をもって研究に取り組んでいる先生がたくさんいらっしゃいました。なかには、何十年かけても答えが見つかるかどうかさえ分からない問題に取り組んでいる先生もいらして、その地道な努力を支えているのは名誉や、金といったものでなく、純粹に「答えが知りたい」とか「解決したい」という強い好奇心であるように見えました。「好きこそ物の上手なれ」という言葉がありますが、まさにこの言葉が当てはまる気がします。そして、そういう先生方の研究に対する姿勢から多くを学びました。

世の中の問題には簡単な問題と難しい問題がありますが、大部分の問題は難しい部類に入る問題で、これらの問題を考えるときは、当たり前ですが、「あきらめず」、「うーんと考えること」が重要であります。現在、私も会社でいろいろな工学的な問題を解決することを仕事としていて、難しい問題について考えることもあります。そのときは、その問題を好きになり、自分がその問題を解決することに対する動機付けを行い、粘り強く取り組むことを心がけています。こういった姿勢で問題に取り組めるようになったのも、つくばの先生方のおかげであり、非常に感謝しております。

＜真の答え＞

入学してからすぐの授業で、ある教授が「君たちはこれからたくさんの講義を受けることになるが、教壇にたつて偉そうに話しをしている先生も実は一つの学説を話しているにすぎない。真理（一つだけある正解）を教えている訳ではないのでそれに早く気づいてほしい。」と話されました。私は、小・中・高と受けてきた教育において与えられた教科書に書かれていることを疑うことをしなかったし、先生の言うことを鵜呑みにしがちでした。確かに、小・中・高で出題される問題では先に答えが何か用意されていて、決まった解法を用いて答えを導くことのみが評価される状況にありました。正解は絶対的に正解であって、それを間違いだと指摘することなどナンセンスであると思っていました。しかしながら、この教授の話しを聞いて、問題はあっても真の答えなどないのでは？と初めて考えるようになりました。

今では、この世の中には絶対的な答えなど何一つとして無く、理解（解釈）だけがあるのでは？と考えるようになりました。そして、物事に対する理解は一つだけでなく、たくさんあってもよく、そのたくさんの理解の中から、必要なときに必要な理解を取り出すことができる人

間が求められているのだと思います。

社会にでて感じることは、学んできた物事を鵜呑みにして、自分の理解になっていない人が多いということです。特に物事を「何々は何々である。」と分類し、物事を整理するのは非常にいいことなのですが、それにこだわりすぎて柔軟に考えることができない人が多いような気がします。そういう意味では、私にとって入学直後に物事の考え方の大きな指針を提示されたことは非常に幸運なことで、その後の私に大きな影響を与えました。

＜おわりに＞

私にとって筑波大学で学んだことは、社会人として、エンジニアとして生きていくための大きな糧となっています。まだ筑波大学を卒業してから、5年、社会人となってから3年しか経っていないため、筑波大学で学んだことを真の意味で発揮するのはこれからであり、ますます精進していかなければと考えております。

最後に、将来私に子供ができて、その子が大学受験をするようになったときに、迷わず勧められるようなすばらしい大学として、この先、筑波大学がますます発展していきますことを心より願っております。

（こんどうとしゆき 工学システム学類）